

夕べ気

大松 達知

日本語の語彙はどれくらいあるのだろうか。英語・フランス語・スペイン語では頻出上位五千語で文学作品の九〇％以上を理解できるという研究がある。それに対し、日本語場合、その率は八〇％強にとどまるという。(対象が偏っているけど) 英語検定準一級(大学中級程度)の目標語彙は七五〇〇語。漢字検定では、準一級の対象が約三千字、一級だと約六千字だという。

そんなことを思ったのは、安里琉太句集『式日』を読んだから。一九九四年沖繩生まれ。大学卒業後から東京在住の作者。

ゆふべけや清水の冷えをこめかみに

夕べ気(昨夜の疲れの残っていること。また、その気持ち。房事や酒酔いについていう。)は、短歌でもほとんど使われない語だ。こういうレアな単語を見ると萌える。まさに、高野公彦の言う「言葉の動態保存」だ。それに、こ

の『大辞林』の定義の中の「房事」だって、ほとんど死語だろう。艶っぽくていい。日常会話で使ったら変な人だと思われそうだが。

水飯や枝打ちの樹を惜しみつつ

スイハンだろう。「冷水で洗った飯。また、水づけの飯。夏に食べる。」と大辞林は言う。宮崎名物の冷汁のようなかもしれない。

在りし日の余蒔の朱樂これほどに

余蒔は、前年の種をまく、つまり在来種のこと。文旦と朱樂は同じだったのか。「これほどに」の後の省略(絶句?)はなんだろう。

他にも、「中空を雨白く降る猿酒」「もの掛くる釘まだありぬ葉喰」「粥腹に昼の小雨や鳥総松」「はんざきはみづを匿ひ十二月」などのレア語に萌えた。俳句という枠組みが共通知として持っている語彙の太さなのだろう。中には、

雲籠めの白花愛しかたつむり

もある。「雲籠」(盆地の上空は晴れて、四囲を入道雲で囲まれている様子)を「花籠めに」をヒントに変化させたようだ。こうなるともうお手上げだけれどなあ。その意気やよし。